

2014 年度博士論文 要旨

題 目：なりわいとしての「小商い」―市と行商にみる地域的流通の意義と可能性―

氏 名：山本志乃

要 旨：

本論の目的は、市や行商に代表される「小商い」を対象に、それを生き方として選択する人々の多様な生活実態を描き出すことをとおして、市と行商の生業としての位置づけをとらえなおし、そこに内在する適応性と普遍性を明らかにすることにある。

本論における「小商い」とは、農山漁村における生産物を、生産者自らが、あるいはそれに近い立場にいる人が入手し、運搬・販売に一貫して携わる小規模な商いを指す。こうした商いは古くから存在し、定期市への出店や行商といった形をとるのが一般的であった。

市や行商は、ともに常設の店舗を持たず、品物を持参した売り手が買い手と直接取引をする商いの形態である。日常生活に必要な買い物の様相が急速に変化する現代社会にあって、こうした原初的ともいえる「小商い」は存在価値を失ったかに思えるが、一方で、直売所や朝市が新設されたり、自動車による移動販売が行なわれたりと、ある種の普遍性と汎用性が存在するのをもまた事実である。しかしながら、「小商い」を人の生き方としてとらえる視点はこれまで希薄であり、民俗学の生業研究においても、生きるための生計活動の中にこれらがいかに位置づけられるかは、ほとんど問題とされてこなかった。

民俗学における近年の生業研究では、1990年代から展開した複合生業論により、各種生業の組み合わせによる生計維持活動の実態をとらえる視点が重要とされる。ただし、この場合の生業活動は、農耕や漁撈などの「生存のための生産活動」を主体としており、生産物の商品化や流通は、商品経済として一線を画するような風潮が一般的である。また本論でいう「小商い」についても、マイナーサブシステムに近い存在としてとらえられたり、あるいは、経済的な基盤が脆弱な零細農山漁村に生じる副業として主たる生業を補うものであるとする認識が固定的であったりと、概して経済的な影響力に対する評価は低い。しかし、こうした従来のとらえ方は必ずしも実態を反映してはいない。

そこで本論では、「小商い」に従事する人々の生活実践を、主として当事者への聞き書きや参与観察によって掘り起こし、これを生業、すなわち人の生き方として、地域の生活基盤の変遷や時代背景とともに立体的に描き出すことを試みた。

具体的には、まず自家生産物の一部を商品とする農家における「小商い」の事例をⅠ章とⅡ章でとりあげた。Ⅰ章では、千葉県夷隅郡大多喜町で開催される六斎市に40年間出店を続けたある女性の日記をもとに、高度経済成長期における産業構造の変化を背景とした「市稼ぎ」への選択を、農家における生活戦略のひとつとして分析した。続くⅡ章では、新潟県上越市で現在も野菜行商（フリウリ）を続ける女性を取り上げた。結婚後、姑から仕事を継承し、やがて独自に販路を開拓して時代に合わせた品揃えを工夫する過程を、当事者のライフヒストリーから復元し、フリウリという生き方への選択と展開について考えた。

Ⅲ章とⅣ章は、鉄道を利用した行商、なかでも漁村地域からの魚行商に焦点を当てた。漁村においては、各家の漁獲物は一旦集荷され、「小商い」の従事者はそこから仕入れて商品とする。そのため、生計維持活動における「小商い」の位置づけも農家に比べてより専門化したものとなる。戦後はさらに、鉄道利用が普及し、専用車両や専用道具を使った集団的な行商が各地で発達した。

Ⅲ章ではその一例として、伊勢志摩地方から大阪に向けた魚行商をとりあげ、零細な漁民から大都市に進出する商人への展開を、時代背景や大阪における魚食文化の発展とあわせて分析した。Ⅳ章では、鉄道を利用した行商がとくに盛んだった山陰線沿線のうち、鳥取県東部・中部地域を例として行商の組織化の実態を明らかにするとともに、女性による魚行商の具体像をとおしてみた地域間の交流や、他者との関係性の構築について考察した。

Ⅴ章では、生産地をバックグラウンドに持たない、販売に特化した売り手を通してみた「小商い」の事例をとりあげた。具体的には、高知県高知市の街路市においてサカキ（榊）とシキビ（シキミ・櫛）のみの販売を続けてきた男性を例に、高度経済成長期を背景とした生産物の新たな資源化を考えるとともに、生産者（山主）と伐採専門の技術者（キリコ）との技術の連携という視点から、極めて地域的で細々とした流通の中に仕組まれた共存の原理を明らかにした。

Ⅵ章は、交易という行為そのものを資源とする地域のあり方と、そこにおける時代に即した「小商い」の展開をとりあげた。事例とする地域は、島根・鳥取県境に位置する中海に浮かぶ大根島である。戦後の社会変化や自然環境の変化に直面するなかで、牡丹苗を中心とする花卉栽培が新しい産業となり、島の女性たちがこれを全国各地に売り歩くという、他に類例を見ない大規模な行商形態を発展させた。行商が衰退した現在においても、新たな形で再現・再生がはかられていることから、「小商い」に内包された生きる力とその普遍性、現代社会への適応の可能性を考察した。

これらの具体例から、「小商い」が持つ生業としての意味を考えると、次の2点が指摘できる。

第1に、社会的な位置づけをとらえるマクロな視点からは、「小商い」にみる地域資源化の可能性をあげることができる。農家の「小商い」においては、生産物がそのまま商品化されるだけでなく、予期せぬ商品化が偶発的に起きることもあり、農家の生活そのものが商品化の可能性をもった資源であると考えられる。漁村地域からの行商では、魚を扱う行商従事者自身の技量もまた資源である。鉄道という近代的な交通機関の利用によって行動範囲を広げ、そこに行商人相手の卸売業といった新たな「小商い」を生じさせるなど、「小商い」を通じた地域間ネットワークが重層的に展開した。また、商品作物の生産に特化してきた地域においては、「小商い」の商品となる資源が時代の変化によってめまぐるしく変わる。ここでは交易という活動そのものが地域の資源であり、交易を主体として地域の各種生業が組み合わされてきたと考えられるのである。

第2に、人と人とのやりとりに密着したミクロな視点からは、他者を内部化することによって成り立つ身体感覚を基盤とした取引とその普遍性をあげることができる。市や行商は、売り手と買い手が1対1で顔をつきあわせ、会話を介して物のやりとりをするところに大きな特徴がある。原則として常設店舗を持たないこうした「小商い」においては、客との固定的で継続的な関係が販売上の戦略となるが、常連客の獲得や関係性の維持には、売り手が経験的に会得した身体感覚に依拠するところが大きい。また、商品が食品や身近な日用品であることから、買い手側の行動においても、個人的な嗜好という身体感覚が大きく作用する。この相互の身体感覚の交感によって引き起こされる取引の成立が、買い手に満足感を与えるだけでなく、売り手にとってもひとつの達成感となり、その積み重ねが仕事へのやりがいや生きがいへと通じていくと思われるのである。

以上の結論から見出された今後の課題は、グローバル化が進む現代社会において再生され続ける「小商い」の存在意義を考えることにある。地域の再編・再生が重要課題となる中で、「小商い」がこれにいかにか寄与しうるか、次世代への継承とあわせて考えていきたい。（2993字）